

磐梨

第33号
2012・6・10発行
金光教教学研究所

澄みやかな耳

—明治一一年六月二日の

(い王なす) (磐梨)
「いわなす」と「いわなし」—

第三部部长 児山真生

数年来、「広前歳書帳」(いわゆる「教祖御祈念帳」)という資料に魅せられてきた。

しばらく前、ある先輩教師から研究内容を尋ねられ、「広前歳書帳」を用いてある地域の信仰展開状況を調べていると答えた。すると「児山さんは教団史研究だよね。教団史研究がどうして教祖の資料(「広前歳書帳」)を見ているの?」と言われた。「広前歳書帳」と聞けば教祖研究を思い浮かべるのは自然であろう。そこで、布教史の研究関心から願主の地域分布域や密度に注目して「広前歳書帳」を見ていること、「広前歳書帳」は教団組織化以前の信仰展開状況をうかがう上で有意義なものであると答えた。そしてまた、このようなお尋ねを受けてみて、私にとっては、全く縁遠い世界に思ってきた教祖研究と、思いがけなく接していることを知った。けれども、もっぱら関心は願主

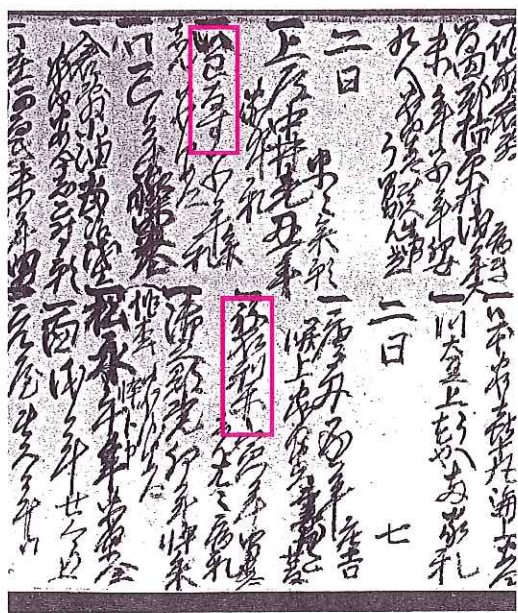
の側に向いており、金光大神は研究する私にとっていまだに近づくことがためらわれる、遠い存在との思いを超えられないでいる。

以前、「広前歳書帳」から、岡山県磐梨郡からの願主の抽出を行ったことがある。磐梨郡については、「磐梨」をはじめ、「岩なす」「岩名須」「磐なす」「い王なす」「岩梨」「いわ梨」などの文字が用いられている。これらを、声に出すと「いわなし」と「いわなす」の二つの音に分かれる。

抽出作業中から、「いわなし」と「いわなす」の二つの音が併用されていることに気づいていた。願主の抽出作業後に「当て字」で記された地名を文献と対照・確認する中で、「磐梨郡」について「古くは「いわなす」と読み、岩生とも書いた」との解説を目にした。「磐梨(いわなし)」は「郡区町村編制法」(明治一一年)以降に定まったものの、土地の人びとの間では「いわなし」と「いわなす」が併用されていた。このことから、金光大神が「広前歳書帳」の中で、二つの音を併用しているのは、願主の発音、金光大神の聞こえ具合に因って生じる帳付けにありがちなことか、あるいはまた、たまたま表記が違った(同じ表記もあり得た)かのように思い、磐梨郡からの願主を抽出すること一本槍の私は、それ以上考えることをせず、二つの音への関心も薄らいでいた。

研究に向けて願主の分析を進めていた時、明治

一一年六月二日の記述箇所にもふと惹かれた(画像参照)。その箇所には、磐梨郡の願主が、帳面上近接する位置に記されながら、「い王なす」と「磐梨」と、異なる音と文字によつて表記されている。この様子から、「いわなす」と発する願主と、「いわなし」と発する願主とが参つて来て、金光大神はそれぞれの願主が発する音を聞き取り、その音に合う文字を当てた、と考えられる。そしてまた、金光大神は「いわなし」や「いわなす」と発する両願主が、備前の同じ地域から参つて来た者であることを知っていたと考えられる。なれば、帳面上の「い王なす」と「磐梨」との表記の関係については、「たまたま」ではなく、金光大神が「わざわざ」そのように書いている(書き分けている)として積極的に考えてみようと思った。



こう思つて、磐梨郡関係の願主の記載状況を見直したものの、今に至つてなお「書き分けていた」という確証を得ていない。このことは「広前歳書帳」の内容分析に関わる課題としておきたいが、その一方で、「わざわざそのような書いている」として意識を積極化すると、願主の肉声を聞き書きするという、金光大神にとつては日常的営みと思ひなしてきたことが、改めてどういふことかと思えてくる。その時、今まで意識することのなかつた、聞き慣れた願主の出身地さえもいま・ここで聞き受けられるべき願いとして聞き続けた金光大神の耳、そこには自らの「慣れ」や「了見」を差し挟まない研ぎ澄まされた耳が存在感をもって浮かび上がってくる。そしてその耳によつて「広前歳書帳」が在ることを思つた。

願主の出身地が知ればとの思いから「広前歳書帳」を用いて研究しています」と言つてきた。もちろん、「広前歳書帳」にうかがえることにおいて、それはほんの一部分に過ぎない。聞き続けた金光大神の澄みやかな耳。その孔から覗く向こうには、いかなる信心の情景が拓けているのであろうか。

(徳島・佐馬地)

★平成24年度の計画★

昨年12月に入所した藤本拓也助手(後掲、「ニューフェイス」参照)を加え、今春も新たな研究年度を出発させることが出来ました。以下に、本年度の主な取り組みを紹介したいと思います。

〔第51回教学研究会〕

「現行教典刊行30年と「覚書」」のテーマのもと、7月6日～7日に開催します。内容は、全体会(発題・討議)、研究発表を予定しています。

〔教学に関する交流集会〕

今秋、名古屋センターの協力を頂き、3年ぶりに教学に関する交流集会を開催します(11月7日、於名古屋市内)。教祖伝『金光大神』が刊行されてから、満10年来年に控えた今回は、「教祖伝を読む」(仮)というテーマのもと、教祖伝から照らされる様々な問題をめぐって、参加者の皆さんと討議、意見交換をしたいと願っています。

〔教学講演会〕

布教功労者報徳祭時(12月)に、紀要52号の研究成果を題材にした教学講演会を開催します。

○

この他にも、教団付置研究所懇話会第11回年次大会(於天台宗総合研究センター)や、諸学会への参加等を通じて、広く教内外の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図ります。

また、引き続き研究に連動した資料の収集・

管理を進めると共に、各種研究講座、研究発表等の充実を図り、より一層、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培つて参りたいと考えています。

【平成24年度研究題目】

〔第一部 教祖研究〕

金光大神における「振り返り」の様相

—「覚帳」の貼紙・追記、「覚書」を手がかりに—
岩崎繁之

金光大神の「祈り」をめぐる一考察

—慶応三年二月十三日の事蹟を手がかりに—
佐藤道文

〔第二部 教義研究〕

「教え」と「おかげ」

—明治末大正期の信心理解のありよう—
大林浩治

「教典」論への視座

—生きた方法からの注目—
高橋昌之

〔第三部 教団史研究〕

昭和四十年代の教務施策立案・実施過程に見る課題

—「現代社会に布教する教会委員会」を中心に—
児山真生

提

研究員

佐藤 武志

言

「信心とは何か？」

「信心すればどうなるのか？」



人は時・所・性別・身体・性格・家族構成等々、自分の生まれや生い立ちを選ぶことはできない。そもそも、生まれようと思っても、生まれたわけでもない。生まれ

れた後も、自分の置かれる環境の決定権はない。病気・事故・出会い・別れなども同様である。

昨年の東日本大震災で出遭った地震・津波・原発事故もそうであろう。原発事故には人為的な要素が多分にあるが、しかし、それも意図的に起こした事故ではない。この世で起こり来る様々な出来事、良い事も悪い事も、私達人間には、その環境を選ぶ権利も力もないのである。

今年の三月一日、本部祭場で東日本大震災慰霊復興霊地祈願祭が執行された。私は中学生になる息子二人のマウンテンバイク購入記念イベントとして、一緒に自転車で参拝した。その道中、「往きはよいよい帰りはこわい」ではないが、往きは穏やかな春日和だったのが、午後は冬の気圧配置が急激に進み、帰る時には雪混じりの強烈な西風が吹き荒れ、ガソ

リンスタンドの幟や看板も倒れるような状況になった。霊地から芸備は西北の方角で、もろに向かい風を受けながら三〇km余りの山坂を帰らなければならなかった。マウンテンバイクの息子達はまだいい、私はママチャリ。風の強さでペダルが回らない。歩いた方が早い位。まだ出発から二kmにも満たない里見川の堤を走りつつ、「何で来る時には無風だったのに、帰りだけこんな強烈な向かい風になるのか」と不満がわき起こり、さらには「往きと帰りで帳尻が合わん」と、自然現象に対して怒りの心が込み上げてくる。次には、「一時間だけでもいいから風を止めて下さい。いや弱めて頂くだけでも」と、状況打開のため反射的に心中祈念をしていた。しかし、当然そんな願いはかなえられないはずもなく、また怒りの心に切り替わった。



その時、ハツとさせられた。この日の朝、NHK総合第一で震災一周年の特番があり、被災者の声が紹介されていた。「神も仏もあつたものか」「神がいるとしたら恨んでやる」と強い怒りの言葉が多く聞かれた。それを聞いた私は、「それまでどれだけおかげを頂いて日々生かされてきたことか。それに対しお札ができていたかどうか。生かされて来たことを忘れ、都合が悪いことだけに目を向け神を恨むのは身勝手では」とか「そもそも人間は、天地の事をとやかく言える立場ではない。それを自覚できていない為に、心を傷めている人達が大量にいることは悲しいこと」などと思っていた。ところがその数時間後

「私はただの向かい風に「帳尻が合わん」と腹を立て、「風を止めて下さい」と身勝手な願いをし、さらに、それがかなえられない事に腹を立てている。この時、「元々人間には、生かされる環境を選ぶ権利はない」ことを改めて強く自覚させられた。

また同時に、「人間には、与えられた環境を『どの様に生きるか』は自由が与えられている」とも気づかされた。すると、向かい風が、被災者の立ち行き復興、犠牲者の霊の道立てを真剣に祈る原動力に変わった。風が強ければ強いほど、ペダルが重ければ重いほど、被災者・犠牲者の方々の事を強く祈らせて頂けた。怒りの心はいつの間にか消えていた。往きより約三〇分余計にかかり体力的にはきつかったが、充実感に満ちた心で無事に帰り着くことができた。帰着後、一男が呟いた言葉も印象的だった。「おれ、金光の町が見えて、あんなに嬉しかったの初めてじゃった。」

人類は太古の昔から、「選べない環境」の中で、どうしようもない時に人間の都合を神に祈ってきた。だが、本教の信心は、そういう信仰とは違う。だからこそ、「信心とは何か?」「信心するとどうなるのか?」が問われ続けている。それに対して、教祖様をはじめ多くの信奉者の信心の在り方と経験は、「受け止め方の自由」「生き方の自由」の様相、さらには、「ただ前向きに生きる人」と「神信心する人」との違いを窺わせてくれ、信心の大切さ素晴らしさを実証的に指し示してくれるはずである。と一人期待しているが、提言になっっているのかどうか。。

(広島・芸備)

前所長佐藤光俊先生御帰幽にあたって

本所前所長である、教務総長佐藤光俊先生が、平成二四年四月二九日御帰幽になりました。

この聖ヶ丘第33号では、刊行計画の都合から特集を組むことが困難なため、ご遺族の了解を頂き告別式における本所所長の弔辞と、歴史学者である小澤浩先生(元富山大学学長)より頂戴した稿を掲載させて頂くことに致しました。

弔辞

元の金光教教学研究所長佐藤光俊先生の御霊前に、謹んで申し上げます。

先生は、道の御用一筋に生き抜かれ、教学研究に、また教政教務の御用に心血を注がれ、言葉に尽くせぬ教蹟を残されました。昭和四十七年の研究所入所以来、教団史研究、中でも教政の歩みを中心として本教の教団とはいかにあるべきかを追究され、所員、幹事、部長を経て平成五年から十七年まで三期十二年に亘って所長を務められました。先生が所長になられてからは、日本と韓国との諸宗教をめぐって、大学の研究者と教団所属の研究者とが相互の問題関心をぶつけ合い磨き合う学術交流が本格

化すると共に、『金光教教典用語辞典』の編纂という、多忙にして充実した年月が過ぎました。その間、運営上の難しい事態に出合うこともあり、部長としてお支えせねばならぬ身でありながら、力不足でお役に立てず申し訳ないことでした。それでも、研究を通して初めてこの道の真実に触れた喜びや、なお残された課題に深い励ましを覚えつつ、それ以上に御用を通して人が育てられていくことにささやかな喜びを感じ、さらにそこからの成長を祈る時間を共にすることができましたことは、御用の経験として幸せなことでありました。

先生は、この道の先輩が若き日に自らを省みた「教師でありながら信者ですらない」という自戒の言葉を

魂で受けとめられ、その戒めを自身にも重ね合わせる形で、「信心させて下さい」との願いをもつて、研究と信心の道を求められました。それは、高橋正雄・和泉乙三師らの先人達が、道の真実を求める探究と軌を一にして、教団の運営に務められた歴史に学ぶものであり、またその歴史をわが身において生きようとする御姿勢でありました。それだけに時には、信心ならざるものとの対決を辞さぬ厳しさを常に抱えておられたと思われ

ます。教学研究を退かれる際には、父君から二代続いて教会長が本部の御用に出ていた教会だからこれからはと、お広前の御用に専念されるお積もりでしたでしょうか、いかなる御神慮でしょうか、教務総長として再びご出仕になりました。教会の事情もさることながら、教学研究に長年従事した者が、研究御用を退いてすぐに教務の場に出ることには、迷いもおありでしたでしょうか、それも突き抜けさせるよくよくのことであり、教団の行く末に向けて真に容易ならぬ御覚悟をなされたことと拝察致します。この間、立教百五十年という本教にとって大きな記念の年を

迎えるに当たり、教祖御立教の精神に立ち返り、何ゆえの教団かという吟味と確認に立って、「この道のおかげの自覚」から生まれる教政教務であり、また教団の、信奉者一人一人の歩み出しであろうと念願されました。それは、先覚の立教神伝解釈から教団論への展開を追究された先生ならではのことでありましょうし、まさしく金光教の歴史に呼ばれ、その呼び声に応えて、身を捧げて御用に仕えるという生きた証を示されました。

御帰幽の前、お見舞いに伺いました時、お声はやや弱く感じられましたものの、意識は明晰で、これまでのこと、これからのことを種々お話しになりました。やむなく教務総長の職を辞されたこと、自分としてはやるだけのことはやったということ、しかし教主を補佐するという御用はいよいよどうあればよいのかを求めて、なお道半ばの思いであること、教学研究で培われてきたことを基にして広く教団の御用に当たってきたつもりであり、今後もそうした志をもつ人が出てきて欲しいし、そのためにもより存在感をもった教学研究の進展を願っていることなど、お話し下さいました。さらにまた、まだ自分

にできる御用があればと思ひ、しかし体は自由にならぬので、この状態でどういふ方をお願ひして頂くことがよいのかを求め、そのようにあらせて下さいとお願ひしているとも仰いました。そのいづれもが、先生ご一生の信心御用から滴り落ちるものであり、あとに残る私共への御遺言と心の奥深く銘じております。

このこと一つとりましても先生が、病院のベッドを修行の場と定めて身を横たえながら、心は常に、本部広前に、金光様のお道筋に、本部教庁の執務室に、加法教会のお広前にあつて、教主金光様の御用成就をはじめ教団万般のこと、教会・ご家族のこと、御縁に連なる方々のことを御祈念下さり、見えぬ形でお働き下されたことは間違いありません。

どうぞこの上とも、この道の真が働きをなし、いよいよ本当のものが表れ続ける本教とならせて頂けますよう、そして教学振興の上にも、お導き下さいますよう、お願ひ申し上げます。

平成二十四年五月二日

金光教教学研究所長 竹部弘

教団史の中の佐藤光俊師

小澤 浩



タイトルの中ではそうしなうと格好がつかない

ので「師」な

どとやつてしまつたが、「身につかないことを言うな」という御本人の声が聞こえてきそうなので、以下、御生前のお付き合ひに倣つて「佐藤さん」と呼ばせて頂く。

金光新聞で佐藤さんの辞意と入院のことを知つて、所長の竹部さんに様子を伺う電話をしてから間もなく、病床の佐藤さんから電話があつた。亡くなるほんの一週間ほど前のことだ。体力が衰えて一〇分が限度だと言ひながら、気が付けば話は四〇分近くに及んだ。最後の時を惜しむかのように。話の大半は佐藤さんが深く関わつた日韓宗教研究者の交流のことであり、とりわけその第一回のソウル大学での研究会の折、ソウルの街

をかけずり回つて李真求さんとの奇蹟的な出会いを果たした一夜のことだつた。私たちは会う度に何度この話を繰り返したことだろう。

佐藤さんは「神さまのお導き」と言つていたが、あれこそは彼の執念が齎したものである。彼は今際の時にも、ソウルの街を駆け巡つている夢を見ながら逝つたに違ひない。受話器を置く前に、私は別れの言葉をあれこれ捜したが、咄嗟に出たのは「今度出す本はあなたに真つ先に読んで欲しいから、まだ死んじや駄目だよ」だつた。「死」という言葉はタブーだつたかもしれない。しかし、それは私の偽りのない気持ちだつた。彼も「楽しみにしている」と言つてくれた。

ところで、折角与えられた紙面を、そうした心情吐露に費やすより、彼の足跡から何を学ぶか、と言うことに思いを巡らせた方がいいと考へたら、御覧のような表題になつた。まだ亡くなつたばかりだと言ひのに、佐藤さんを「教団史の中で位置付ける」と言うのは気が早いようだが、いづれそのように扱われて然るべき人だと思ふので、私は取りあへず先鞭をつけ、後事

をそれにふさわしい人に託したいと思ふ。

佐藤さんの足跡と言つたとき、私たちがまず念頭に浮かべるのは研究所時代の彼の仕事であろう。学者が好んで使う言葉で言えば「研究業績」である。そして、宗教団体といへど世俗化の波から自由でありえない以上、いわゆる業績主義に安んじて過ごそうと思へば、出来なくはないのがこの世界だ。しかし、佐藤さんの仕事には、研究者としての枠組みを常に突き破つていこうとする広がりがあつた。彼が教務総長に就任した時、人々の心の中には色んな思いが去来したはずだが、そうした彼の問題関心、研究の姿勢を今から振り返ると、教務総長はその延長線上にあり、誤解を恐れずに言うなら、彼には命と引き換えにでもそれを背負つていく覚悟が出来ていたからではないかとさえ思ふ。

端的に言つて、キーワードは二つある。一つは「教団」であり、一つは「歴史」である。併せて「教団史」と言つてもいい。研究所には教祖研究と教団史研究を主とする二部門があるらしい。それは役割分

担であるにしても、両者の内的な緊張を踏まえないで夫々の研究を深めていくことはできない。そして佐藤さんは教団史研究を自らに課した。私の勝手な推測によれば、人はいかにして救われるのかと言う問題を突き詰めていくと、教祖の信心に向き合うことは当然のことながら、歴史の中では、教団という組織体のあり方がそこに深く関わっていて、そのあり方を問うことなしには、自らの助かりも、人の助かりもありえないという問題意識を、どこかの時点で深く心に刻んだからではないだろうか。

たとえば、彼の視点は、『金光教の歴史に学ぶ』という著書の表題によく示されている。私も歴史の教師だった頃、学生たちのレポート集に『歴史に学ぶ』という表題を付けたが、それは人々によって生きた歴史が、我々の「生き方」を考える資料の宝庫だからであり、だから他の教科と同じように「歴史を学ぶ」のではなく「歴史に学ぶ」でなくてはならないのだ、と書いたことがある。佐藤さんにとっての歴史もそのようなものとしてあったのだと私は思う。それを教

団史と言うものの中においたとき、佐藤さんは一層その感を深めたのではなからうか。彼は、『金光教の歴史に学ぶ』の中で、「現在よりも過去が、現在をよりよく語ることもある」という言葉を引用しているが、それは彼の歴史に学ぶ動機を余すところなく伝えている。

そうした立場からの彼の教団史への接近が、鋭い批判精神に支えられたものであったことは言うまでもない。彼はこの本の中でこれまでの教団史研究を「御発展史観」と「墮落史観」の相克と捉え、後者への共感を示しながら、その批判が生かされるか否かは、我々が究極的に「教団」というもののはたらかきを信頼しているかどうかにかかっているとしている。内村鑑三の無教会主義に若干魅かれていた私には賛成しかねる部分もあるが、彼の教団批判に説得力があるとしたら、それは彼の批判が「教団」のはたらかきへの信頼を前提とした内在的なものだったからに違いない。そして、彼の『李元珪先生をたずねて』の旅や、その後の日韓の学問交流への取り組みこそ、彼のそのような批判精神が齎した最大の成果

であったと私は考える。それを、教団の役割分担の一つと見るに止めたいけない。彼はそこに自らの信仰をかけ、教団の根本的なあり方を問おうとしていたからである。昭和九年十年事件のとき内局を担ったのは、それまでの教団政治に対する急先鋒の批判者と目された高橋正雄師だった。いざというときにそうした人事を断行し得るところに、金光教団の可能性があるとしたら、このたびの佐藤光俊内局の人事にもややそれに似たも

のがあったと言えよう。しかし、それはやはり金光教の危機の顕在化に他ならない。佐藤さんの教団史への視点が生かされるかどうか。そこにこれからの金光教の命運がかかっているように思えてならない。

お願い
佐藤先生を偲ぶ特集号の発行を計画致します。佐藤先生との思い出等、お寄せ頂ければ幸いです。



取材を受ける佐藤先生
平成一七年 於・本所所長室

佐藤光俊先生所内経歴

- ・ 研 究 生 S47.06.01 ~ S47.11.30
- ・ 助 手 S47.12.01 ~ S51.03.31
- < 休 職 > S49.04.30 ~ S50.05.01 (学院入学)
- ・ 所 員 S51.04.01 ~ H05.06.30
- ・ 幹 事 S56.10.01 ~ S58.10.31
- ・ 部 長 S58.11.01 ~ H05.06.30
- ・ 所長職務代行 H01.05.01 ~ H05.06.30
- ・ 所 長 H05.07.01 ~ H17.06.30
- ・ 嘱 託 H17.07.01 ~ H18.09.10

「中州」があった大谷村

—〈原典ゼミ〉 実地調査の記録—

〈原典ゼミ〉では、「お知らせ事覚帳」や「金光大神御覚書」の原典（影印本）の講読の他に、年に数回、実地調査を行っています。平成23年度は、小野家文書（大谷村の庄屋に所蔵されていた文書資料）にある古地図を手がかりに、大谷村（現金光町大谷）の「中州」を辿りました。 報告者・所員 岩崎繁之

古地図

小野家文書の中に、大谷村の全体を表した古地図があります。中には、「岡山縣備中国浅口郡大谷村測量絵図 甲・乙」（写真①）。以下、大谷村地図と略記）と記された二枚組の古地図のように、大型のものがあります。興味深いのは、描かれた大谷村の輪郭、いわば境界線



の位置です。

大谷村は川を境に占見村や占見新田村と分かれていると思いきや、

現在の地図（写真②）には川の向こうにも大谷の地名が記されています。そしてそれを大谷村地図に見ると、中州だったことがはっきりします。

現在の地図と見比べると、里見川の川筋が異なっており、中州は見当たりませんが、大谷村地図では、「中新田」と記された中州が見て取れます。中州は、「田地・畑地」に色分けされています。この中州は、現在、どのようになっているのか、また、当時の痕跡を残すものが何かあるか。金光大神存命中の



写真① 「岡山縣備中国浅口郡大谷村測量絵図 甲」 縦227cm×横335cm。上部、中央辺りが「中州」。 2枚組の乙は、縦264cm×横172cm。



写真② 現在の大谷地区 (昭文社、2006)

風景を思い描くべく、古地図を手がかりに、中州を辿る実地調査を行いました。

実地調査

当日（平成23年9月16日）は、薄曇りで夏の暑さも幾分和らいでおり、歩くには適度な日中で、幾つかの地図を手に研究所を出発しました。

中州だったところは、現在では里見川を挟んだ対岸に当たり、住宅地になっっています（写真③）。地区名は「大谷東」で、その名残を留めています。通りかかった地元の方の話では、今でもこの地区を掘り起こせば砂地が出てく

るそうです。

金光大神は農業に従事していた時期には、「札場西の田」（ふじや呉服店辺り）に通っていたり、また、堰番・堤番を担い、用水に気を配っていたでしょうから、里見川の様子にも注視していたのではないのでしょうか。

「覚帳」「覚書」には、この中州のことは記されていませんが、金光大神が見ていた風景の中に確かにあったことが想像されました。

その後、里見川沿いを鴨方方面に向けて歩を進め、大谷の西に位置する「須恵」との境界を辿り、国道2号線へ出て、帰途に就きました。

地図を手手に現地を歩くことで、紙面上で見ていた時には想定しなかった視点（例えば、より生活に密着した見方）が浮かんで

きます。と同時に、古地図を手がかりに過去の土地勘を鍛えることになればと考えられています。



写真③

研究所の思い出

「筆写本」との

出会いを通じて

藤井 喜代秀 (元所員)



教学研

研究所で、
一九年間
お世話に
なりました。

学識もな
い者かと思ひ、恐縮し感謝申上げ
ている。

在任当初は、御理解研究が盛んな頃で、『研究資料金光大神言行録』が五巻(三〇六二項目)まで編まれ、私はその後の「六巻」の編集に若干加わった。そして、九三五項目の「六巻」の索引作りに取り組んだ。ボールペン原紙を使いながら一八三頁の細部に亘る索引作りの結果、研究所で保存されていた、明治二、三〇年代から成立する、教語類を筆録しまとめた、いわゆる「筆

写本」と呼ばれる資料群の解明へと導かれた。「筆写本」は、金光四神理解や直信・先覚らが伝える教えを集めようとする活動の実際を示しているが、資料の中には、先に筆録しまとめた教語類を写し取ったりと、様々なものが混在しながら、毛筆で、六〇〇頁にわたる教語類が収録されているものもあった。

当時私の関心は、教団草創期の教内状況の把握にあったが、それまで私が考えていた、教団中央が打ち出す「神誠」(「神訓」)の教条路線で教団は拡張していったというのはい面的な見方であることを知った。その資料群を分析して(発掘されたものは、それらの一部と考えられる)、地方現場では、直信の伝承する一部の教祖理解に加え、「御道案内」(「御道晰略記」)や「四神理解」(筆写本の多くが収録)などを内容とする、物語的な理解が教導の場で語られ、布教拡張の実を挙げてきたという実態に少なからぬ驚きを得た。

「霊験力」と「理解力」は、取次

の重要な要素であるが、教義的整備の不十分な教団草創期においても、難儀を抱えて願いくる氏子におかげを授けると共に、ある意味適確な「金光教案内」が既になされていたのである。それが「筆写本」には映し出されていた。その点で、「願う氏子におかげを授け、理解申し聞かせ」という営みは、教祖没後早くから、地方の布教現場の核であったことを窺うことが出来た。

布教者たちは、最初の頃、「二三里の道を歩いて、それを写しに出になった」と伝えられるように、たとえ僅かなことでも、労力を惜しまず教えの収集に努めた。道の教えを正しく伝えようとする願いからであった。今日公刊された『金光教典』中の「御理解集」の一部にも、その収集活動は影響を与えている。膨大な数の教えと資料群が今日の私たちを支えている。「直信先覚先師ありて道はいや広がりぬ」、この言葉の深さと、布教現場の力を学んだ時期であった。

(岡山・本部)

ニューフェイス

平成二四年度は、研究生の採用がなく、昨年一二月一日付で研究生を委嘱され、本年一月一日より助手に任命された藤本拓也さん(東京・赤羽教会)一人の紹介となりました。

藤本さんは、研究生応募まで研究員を委嘱されており、職員には顔なじみであります。新人ではありますが、今号「研究報告の種」のコーナーに執筆もしています。

そんな藤本さんへのインタビュー記事です。

藤本さんは、東京大学大学院で宗教学の研究をしていた。もともと信者の家庭ではなかったが、平成一六年に図書館で「覚書」に出会い、そこで語り出されている世界に驚いたという。そして、実際の信仰の世界を覗いてみよう、と教会に初参拝した。入信当初から教学に関心を寄せ、教学研究会の

結果を出す生き方

畑中 浩一 (元主事)



研究所の事務室でご利用にお使い頂いたのは、二〇

数年前の事です。この時は、福岡義次先生が研究所長としてご利用しておられました。

思い出に残っていますのが、私にとつて初めてのコンピュータ業務を授かり、分からないまま懸命に勉強したことです。夕方、五時にご用が終わって家で食事し、その後すぐに研究所に戻って夜一〇時頃まで勉強いたしました。時には午前一時頃になることもあり、宿直の先生に無理をお願い致しました。自分が宿直の際は、朝の四時まで勉強しました。あるときは、寝るのが朝方になり交代の先生に起こされたこともありました。

この場をお借りし先生方にご迷惑をおかけしましたことお詫び申し上げます。

げます。

研究所で過ごした時間は、私の人生に於いて貴重な時間だったと思っております。現在は、教師の身ではありませんが、事情がありまして一般で働いております。自分は、人に使われる人間なのにコンピュータの会社の経営者として仕事しております。

今の時勢は不景気で何の業界も大変です。あるとき、一般の信者さんからこんなことを聞かされました。「金光の先生は、一般で働いていないので世の中のしんどさが分かっている」「お取次で良いことを言われるが、一般で働いていない人に何が分かる!」「先生が今この時世で仕事を成功したなら、先生の話聞き入れる」ということでした。

この言葉は、確かに肝をついています。

私は、教師で結果を出せるよう努力しております。今、金光教は、信者さんが少ないとか言われていますが、「金光教の教えを頂きながら結果を出して真剣に仕事をすればこうなるといふ手本を示せるようにがんば

りたい」と思っております。そして、若い人に「金光教を信仰すれば、このようになるので付いて来てほしい」と言えるような人になりたいです。

話は、少し変わりますが、最近金光教の教えの受け取り方が変わってまいりました。昔は、「実意丁寧信心」せよと思っていました。最近仕事が忙しくなればなるほど「実意丁寧させて頂かないと無駄が生じる」ということが分かってまいりました。

人それぞれ金光教の教えに対する受け取り方が違うと思いますが、私は、「教祖様は、神様に一心にお祈りしながらの生活をしている」とこのようになって来た、ということをおっしゃっているのかな?と思うようになりました。「そのようにしなければ」ではなく、自然とそうようになっていったのです。

「若い人も金光教の信心をしっかりしてほしい」と願っています。生き生きとした明るく楽しい信心生活を目指しております。今後とも、よろしくお願いいたします。

(兵庫・加古川)

常連になり平成一八年には研究員に委嘱された。そして、博士論文提出を目的に、教学研究に専念したいと、研究生に応募した。

学生時代は文学と映画に入れ込み、大学のサークルでは映画を制作、(下手な)シナリオを書き、(大根)役者として活躍していた。

趣味はカラオケ。主に歌うのは懐メロ・昭和歌謡だが、最近は一八〇年代の、昭和歌謡以外にも手を出しているそうである。

助手になってからは研究員や、研究生時の「お客さん」的雰囲気とは違って、「前より自分に対して厳しくなり、そのおかげで色々気付かされた」とのこと。

「自分は、面倒臭がり」という藤本さんは、一方でそういう癖のある人間の本質に教祖とのつながりが生まれることを確信しているようであり、そのあたりが本所です。のように發揮されるのか楽しみである。

研究報告の種

平成二三年度の研究報告(九本)が平成二四年二月一〇日に提出され、後日、各研究報告の検討会が行われました。

例年、その内容をお伝えしています。が、今年は、二人の助手が研究報告執筆に到る道程で、示唆を得た書籍の紹介を行います。

研究報告が花開く種の要素に触れることで、教学を身近に感じ、共有出来ればという試みです。

出逢い・お知らせ・研究報告

—その奇遇と機縁—

第一部助手 白石淳平



晩成の私小説家として知られる耕治人の遺作、いわゆる命終

三部作『天井から降る哀しい音』『どんなご縁で』『そうかもしれない』は、不遇の作家人生を支え続けてきた妻の認知症の進行を体験的に綴ったものであるが、それは次のような印象的なシーンによって有名になった。

ある夜、二階の寝室からドスンという物音がする。夫は急いで様子を窺うのだが、そこには、ベッドから転げ落ち、畳に尿を漏らしてぼう然とする妻の姿があった。慌てて介抱しようとしたその時、力無い声で呟かれた、「どんなご縁で、あなたにこんなことを」という妻の言葉に、夫はハッとさせられるのだった。やがて妻が介護施設に入所してから三カ月ほど経った時のこと、自身の癌摘出手術のために入院していた夫のもとに、付添を伴って妻が面会に訪れる。その際、付添の施設職員が妻に対して、「主人ですよ」と声をかける。すると妻は、しばらくの無言の後、「そうかもしれない」との言葉を発するのだった。

眼前の夫という存在に驚くかのような妻の発言の意外さは、たとえその理由が認知症という原因に求められるにしても、夫にとっては、それまで自明であったはずの夫婦関係を揺るがす体験として出逢われるものだろう。三部作では、認知症の妻に翻弄されつつも、同時に自身への負い目として悔いていく夫の「痛み」が描かれる。しかし印象的なのは、変わり果てていく妻に対して、「自分の妻」としての向き合いに促されていく夫の姿勢である。

夫が聴きとった「どんなご縁で」「そうかもしれない」といった言葉は、認知症という現実状況における関係をまさぐる発言として、妻の側からもたらされたものだった。だからこそ、その衝撃を自身への「迫り」として受けとめる夫は、「妻」という存在そのものとの「出逢い」へと導かれるのだろう。そしてその「出逢い」という事態こそ、読者を巻き込みつつ、現実へ向けた意味の開かれに夫を立ち会わせていく当のものではないだろうか。

実際、認知症の妻に向き合う中で夫は、妻の小水が清い小川のように映った、との思いを抱く。さらに、施設の職員によって身体を洗われていく痩せ細った妻の姿に後光が射す様を感じとり、「この世ならぬ美しいものにならなくてゆく」様を目にする。そして癌摘出手術の末、危篤状態を脱した夫が、「呆けた家内が、私をすくったのだ」と、妻との「出逢い直し」による自らの「救われ」の実感語る結末に至る。村瀬学はそれを、「小さな神様」の感じ取り」とも評している(『あなた』の哲学)講談社現代新書、二〇二〇年)。

この作品がなぜ私の研究関心に訴えてきたかといえば、そこで描かれる世界に、金光大神家族をめぐる「覚帳」の記述に通じるものを見させられたからであ

る。認知症の妻の言葉は、存在の神秘という現実の意味へ触れさせ、人智における自明性を揺さぶりつつ現実へともたらされた「お知らせ」に重なる。その時、家族の存在を介して知らされる現実の意味に、神を見出していく金光大神のありようが想い起こされるのである。

妻の認知症によって、存在の意味や夫婦関係の自明性を問われる夫の「痛み」を、「出逢い」として裏返すこの作品の問いかけは、現実世界へ向けた「お知らせ」の意味と響き合い、私に迫ってくる。「出逢い」は、その時その瞬間における体験としては、「今」を開くが、その深まりにおいて、抱えられた過去をも解いていく。だが、さらに「出逢い」は「出逢い」として抱えられ、そして、新たな「出逢い」によって更新されつつ、出逢われ続けていくものでもある。絆が願われる今なればこそ、「覚帳」を読み解いていくことは、目の前の現実における奇遇と機縁に触れていく「出逢い」の営みであると信じる。今回、金光大神のもとで家族の意味を問いかける「お知らせ」を題材として研究報告に取り組んだが、改めて、研究報告とは、そこで出逢われるものが、新たな「出逢い」を生み出していくことへの「願い」になっている気がしてならない。

(愛媛・南宇和)

口ごもりつつ語ること

—私にとっての御用—

第二部助手 藤本拓也



五年から、以前から、I would prefer not to という英語は、私のかでずつと響いていたのだが、それは、久しぶりに再会した友人に言われた言葉だった。どう訳せるかと聞かれて、一瞬よく分からなかった。Prefer は「好きだ」という意味で、prefer to...になると「～したい」だろう。だから、「したくない」ということだろうか、そして、wouldは婉曲の表現でもあるから、「したくない」に結びつけると、という感じで考えた。そのうち、友人が、「しないほうがいいのです」と言う。「しないほうがいいのです」と言い続けた男の小説があるらしい。それから後、その小説を読むことはなかったのだけれど、I would prefer not to という言葉をときどき思い出していた。そして私は、八年余り所属していた宗教学を修了し、昨年一二月から、研究所で御用させていただくことになっ

た。初めての研究報告を書きながら、心に引っかかっていた「しないほうがいいのですが」を読むことにした。

※

時代は一八五〇年代初頭。語り手はニューヨークのウォール街に構えた事務所所で平穩な業務をこなしている初老の法律家で、羽振りのよかった数年前を回顧している。業務量の増加から、一人の筆生を新たに雇うことになった。それが、寡黙で蒼白い、バートルビーである。仕切りに囲われた持ち場で、彼ははじめ、筆写を黙々とこなしているが、筆写の照合をするように言われたときから、「しないほうがいいのですが」という言葉を口にしはじめる。この得体の知れない傾向はしだいに度を超したものになり、彼はついに筆写することさえやめてしまうが、といって事務所から出て行くこともしない。帰宅することもなく事務所に住みついてしまうのである。法律家は、自分のほうが事務所を移転させて彼を厄介払いすることにする。しかし、バートルビーは建物から離れず、大家たちの手配によって、刑務所に「浮浪者」として収容されてしまう。彼はそこでも食事すらしようとせず、まもなく獄内の庭の片隅でぐったりと横たわって死んでいる姿を発見される。

※

仮に、バートルビーが「したくありません」と言うのであれば、それは依然として意志的な決断を意味している。その限りで、「しないほうがいいのですが」は、「したくありません」ではない。バートルビーは、消極的な仕方拒否しつつ、しかし頑なに「しないほうがいい」を貫き、死んでしまうのである。こうした「しないほうがいいのですが」の謎について、イタリア人哲学者アガンベンが、それを潜勢力 (potentiality) として解釈している(ジヨルジョ・アガンベン『バートルビー—偶然性について』高桑和巳訳、月曜社、二〇〇五年)。すなわち、アガンベンは「しないほうがいいのですが」に、することもしないこともできるという可能性—潜勢力を読み取っていくのである。

※

話は前後するが、私は、無用者として自己規定したシオランという人物の宗教思想を研究してきた。その頃からの関心は、つづめて言えば、無用性にとどまることで、そのポテンシャルのままに赦さるということを直覚できるのではないかと考えた。この考えは、根本のところでは変わっていない。けれども、無用性は、私の中で微妙に変化してい

る。役割がないと感じ、そして、弱くなっている人たちがなお言葉を発する意味を考えることが大事じゃないかと思うのである。そういう時、バートルビーの言葉が響いてくる。つまり、子どもからお年寄りまで、一時的に弱くなっている人々が、そのままでお役に立っているということを直覚する途を求めていくこと、それが、私の御用であると感じる。言い換えれば、バートルビーが生き延びていく道に繋がっていく研究を担って行きたいと願っている。

※

こうした思いは、研究報告を書く過程で、徐々に確かなものにされていった。私は、様々な問題状況に晒される教祖が、お知らせを聴き受けることで神への責任を引き受け、同時にまた、指示される事柄への責任をも引き受けていく姿を辿り直していた。それは、先祖や香取繁右衛門といった他者への責任を引き受けていく中で、神との交わりも深化していくこととして気づかされ、私の中に結ばれた、一つの教祖の像である。そして、研究報告を書き終え、教学研究の出発点に立つてみたとき、上述したような思いに捉えられるのである。

(東京・赤羽)

彙報

(平成二十三年六月一日)
二四年五月三十一日

人事関係

一、職員(教団職員)

- 助手早川貴子、八月三十一日付で辞任。
○教師佐藤幸乃、九月一日付で書記に任命。
○教師山田光徳、一〇月一日付で助手に任命。
○助手堀貴秋、一〇月三十一日付で辞任。
○信徒藤本拓也、一月一日付で助手に任命。
○部長児山真生、三月三十一日で任期満了、翌四月一日付で再任(第三部長に指名)。

二、研究生

- 研究生山田光徳、九月三〇日で委嘱期間満了。
○信徒藤本拓也、一月一日付で研究生を委嘱。
○研究生藤本拓也、一月三十一日で委嘱期間満了。

三、嘱託

- 嘱託渡辺順一、六月三〇日で委嘱期間満了、翌七月一日付で再度委嘱。

四、研究員

- 研究員保坂道照、九月三〇日で委嘱期間満了。(二期八年)
○教師松岡光一、同宮下寿美、一〇月一日付で研究員を委嘱。

○研究員藤本拓也、一月三〇日付で解嘱。
五、評議員

○評議員松沢光明、二月一九日で任期満了、翌二月二〇日付で再度任命。

♪おめでた♪

出産

○主事中西教幸・美由祈夫妻に八月八日、次男地明(ちあき)くん誕生。

結婚

○助手高司智太郎は二月八日、中間則子さんと結婚。



今号も無事発行が出来ました。寄稿して頂いた方を初め、お世話になった方々に御礼を申し上げます。

さて、新年度を迎え、五月一日より各研究講座もスタートいたしました。従来、年度の前半は、研究生を受け入れその実習が中心となり業務が進められていきます。講座を担当する職員もそれぞれの立場から研究者養成というところに主眼を置き取り組むのですが、今年度は、二

五年ぶりに研究生の委嘱がないというご時節を頂きました。これは、所長以外の職員にとつては研究生がいない年度始めの初体験になります。

職員それぞれに、何かしら例年との違和感を感じながら業務を進めているのではないのでしょうか。

研究生不在ということになると、人材確保の絶対数がゼロということになり助手採用が見込めず、数年来の懸案であった人材育成ということがより深刻になるように思われます。

しかし、考えようによっては、このような現状だからこそ、それぞれが研究に没頭し、力をつけるための時間を与えられたとも思え、年度前半に開催される教学研究会に向けての濃密な時間が得られることとして、良事と捉えたいものであります。

この一年は充電期間として、来年度の研究生に応募者があることを祈願しながら、職員一同が精進して参りたいものと思わされているところであります。



発行・印刷 金光教学研究 所
岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三
電話 (0865)4213117
FAX (0865)4213119